

関係人口の創出と深化に向けて

～首都圏で可能な八幡浜への関わり方の提案～



八幡浜市 田中 航介

はじめに

現在、日本の地方都市では少子高齢化や首都圏への進学・就職による人口減少が大きな課題となっている。特に、首都圏への人口集中は止まることがなく、令和元年 11 月には東京都の人口が 1,395 万人を突破した。首都圏以外の地方自治体では、首都圏への人口流出を抑制し、地域の活力を補うため、移住・定住政策による「定住人口」や、観光事業等の振興による「交流人口」の拡大に力を入れているところである。しかし、限られた日本の人口の中ですべての自治体が定住人口を増やすことは不可能であり、現在の定住政策の取組は各自治体の「人口の奪い合い」という競争になってしまっているのが実態である。

そんな中、定住人口でも交流人口でもない新たな考え方として、「関係人口」という言葉が生まれている。これは地域や地域の人々と多様に関わる人々を指す言葉であり、地域外に居住しながら、地域と関わっている人を指している。総務省は、この関係人口について、図 1 のように「現状の地域との関わり」と「地域との関わりへの想い」という 2 つの軸でまとめている。この中では関係人口を、出身などで地域内にルーツを持つが現在は地域外に住んでいる人や、過去の勤務や居住等で何らかの関わりがある人、地域を行き来する人（風の人）を関係人口として位置付けている。現在、「田園回帰」「ふるさと納税」など、地方と関わりたいというニーズが増えてきている中で、この関係人口をどう増やしていけばいいのか。また関係人口

が抱えている地域への想いをどうすれば深めることができるのか。

本レポートでは「八幡浜という地域全体」（以下、「八幡浜」という。）の関係人口の拡大と、首都圏在住者の八幡浜への想いを深めるための取組について考察したい。



図 1 関係人口イメージ図（関係人口ポータルサイトより）

1 八幡浜市の概況

当市は、愛媛県の南予地域の北西部に位置する人口 33,270 人（令和元年 11 月末日時点）のまちである。四国最西端の佐田岬半島の基部に位置しており、九州と距離が近いことか

ら海上交易が栄え、明治時代中頃には「伊予の大阪」と称されるほどの賑わいがあった。現在でも、大分県とフェリー航路でつながっており、四国と九州を結ぶ西の玄関口となっている。

当市の産業の中心は農業や漁業などの一次産業である。

農業では、温州みかんを中心とする柑橘産業が盛んなまちである。愛媛県は 40 種類以上の柑橘を生産しており、柑橘全体の収穫量では日本一を誇る「かんきつ王国」である。中でも、八幡浜市・伊方町・西予市（旧三瓶町）で構成する西宇和地域で生産する柑橘の収穫量は愛媛県全体の約 4 割を占めており、愛媛県の柑橘生産を支える一大産地である。特に、当市は温州みかんの生産が有名であり、市内の「日の丸」「真穴」「川上」という 3 ブランドは全国の温州みかんの価格を決めるともいわれるプライスリーダーとなっている。

また、漁業では四国でも有数の水揚げ量を誇る八幡浜魚市場があり、年間で 200 種以上の魚が水揚げされている。豊富な種類の魚を利用した蒲鉾や魚のすり身を油で揚げる「じゃこ天」などの水産加工品が多いことも特徴である。

一方、当市の人口に焦点を当てると、1950 年代を境に市の人口は減少の一途をたどっており、現在はピーク時（約 72,000 人）の半分ほどとなっている。減少の理由として、少子高齢化の進行による自然減や、大学進学や就職のタイミングでの若年層の社会減が挙げられる。自然減や社会減の抑制を中心とした人口減少対策は、当市にとって重要な課題の 1 つであり、市では移住施策や空き家活用施策に力を入れている。



図 2 八幡浜市位置図

2 八幡浜市における関係人口創出の取組

そんな中、当市では県外在住の関係人口の創出と拡大のため、以下のような取組を行っている。

(1) 市内高等学校の同窓会への出席

当市内には 3 つの高等学校があり、それぞれの学校が毎年、同窓会を開催している。県内の本部のほか、県外にも支部があり、それぞれ開催の際には市長や市職員も参加し、市の PR やふるさと納税の募集を行っている。出身者同士の交流が図られている一方で、参加するメンバーが固定化されつつあることに課題がある。また、参加者の年代も 60 代以上が中心となっており、会の若返りに苦心している。

(2) 大学生インターンシップの受入

平成 30 年度からソフトバンク株式会社と連携し、大学生と協働で地域課題解決に取り組む「TURE-TECH」というインターンシップを受け入れている。参加する大学生は全国から応募のある中から選ばれた約 30 人で、それぞれ 5 班に分かれ八幡浜が抱えている課題の解

決に取り組む。市民や市役所、企業へのヒアリングなどを重ね、最終的に市長へ課題解決のプレゼンテーションを行う。

このインターンシップにより、市内に外からの目線が加わり、市民や行政、企業にとって大きな刺激がもたらされている。また、インターンシップ終了後も継続して八幡浜に関わり、自分たちが提案した事業の実施のために取り組んでいる参加者も存在する。実行可能かつ優良な提案は予算化されることがある。実際に、平成 30 年度に提案のあった市内の子供への魚食普及推進事業は市の事業として予算化され、市役所と共同で事業の実施に至った。インターンシップ後も継続して八幡浜に関わってくれる大学生も存在し、八幡浜との関係の深化を見ることができる。

(3) ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会

毎年イギリスで開催されている世界最大のマーマレード品評会を令和元年 5 月に当市で開催した（イギリス・オーストラリアでも継続開催）。この大会は日本では初めての開催であり、これまで開催されたイギリス、オーストラリアという英国連邦以外でも初めての開催であった。

日本での第 1 回大会である令和元年 5 月には世界中から 1,614 点ものマーマレードの応募があり、当市の PR につながった。また、大会当日には市外からも多くの人々が来場し、市内の観光や特産品の紹介を通じ、交流人口の拡大にもつながった。この大会は 2020 年、2021 年の日本大会も当市で開催することが決定している。

(4) 首都圏交流会「東京やわたはま会」

平成 30 年に在京の市出身者の声を受けて発足した首都圏交流会である。これは、市の出身者のみならず、八幡浜に興味を持っている人ならば誰でも参加可能な交流会であり、前述の高等学校の同窓会参加者やインターンシップ参加の大学生、マーマレード大会への出品者も参加している。会場では当市の取組の PR や八幡浜の食材を使った料理のふるまいのほか、特産品の販売、ふるさと納税の募集などを行っている。令和元年も開催し、2 年連続の開催となった。

市外出身者も参加できる点が特徴であり、参加者の約 4 割は市外出身者である。八幡浜に興味がある人やこれから関わりたいと考えている人も存在し、八幡浜の魅力に触れる機会となっている。また、市内から上京して参加する人も存在し、会への参加や特産品の販売などを通じて首都圏の参加者との交流が生まれている。この会で初めて八幡浜との関わりが生まれる場合もあり、八幡浜の関係人口の創出や関わりを深化に大きな効果のあるイベントとなっている。

3 東京やわたはま会参加者の声

このような取組を通して、八幡浜の関係人口は広がりを見せているが、その関係をさらに深めていくためにはどのような方法を取ればいいのか。そのためには、八幡浜を応援してくれる関係人口はどのような人がいて、どのような想いを抱いているのかを具体的に知る

ことが必要だと考えた。

そこで、筆者はその手がかりとして、東京やわたはま会参加者への独自の聞き取り調査を行った。東京やわたはま会には首都圏在住の市出身者のみならず、市外出身者も多く参加しており、出身者・市外出身者の双方から話を聞けると考えたためである。東京やわたはま会の参加者 6 名に対して、八幡浜への想いや首都圏交流会に参加してみても感想、悩みなどについてヒアリングを試みた。

(1) Aさん<50代・男性, 隣接市町出身, 市内高校卒, 仕事上のつながりあり>

港湾関係の仕事で全国を飛び回っており、八幡浜市の港の関係で仕事をしたこともある。どこに行っても高校時代を過ごした八幡浜は特別に思い入れがあり、地元である八幡浜がもっと発展してほしいという気持ちがある。年に何度か八幡浜に帰省する機会があり、帰るたびにお気に入りのじゃこ天などを購入し首都圏の知人にふるまうこともある。

東京やわたはま会に初めて参加してみても、地元の人と交流する機会ができて本当に良かった。会の日程次第だが、八幡浜の会には今後も参加したい。また、東京やわたはま会のつながりを生かして、普段から集まりたい。

悩みは、東京に出てきている八幡浜市出身者が少なく集まる機会が少ないこと。また、実家に帰省しても知っている人が少なく、することがないこと。

(2) Bさん<40代・男性, 市内出身, 市内高校卒>

東京に出てきて長いですが、高校の同級生を中心に地元の人たちともつながりがある。地元の人たちと集まれる機会は嬉しい。

東京やわたはま会には初参加。初めての参加で不安だったが、行ってよかった。特産品の販売ではPRの仕方や商品の陳列などに改善の余地がある。仕事でも携わっている分野のため、協力できることがある。

悩みとして、八幡浜のことは気になっているが、どう関わっていいかわからなかった。特に、現在市内に住んでいないため、気になることがあっても言いづらいと感じている。また、仕事の関係で全国転勤があり、東京にずっといるわけではないため、いつまでも関わられるか不安。

(3) Cさん<60代・男性, 市内出身, 東京やわたはま会発起人>

市外の高校に進学したため、市出身の同級生とのつながりが弱く、市出身者やゆかりのある人が集まる機会がずっとほしかった。飲食店を経営しており、八幡浜の魚介類や柑橘などを仕入れて提供している。八幡浜出身の人もよく来る。

東京やわたはま会は 2 年連続参加。集まる場ができてとても嬉しい。出身者の集まりは様々なシーンで必ず活かせると考えている。2 年目の東京やわたはま会では、自身の経営店を使って初めて 2 次会を企画した。事務局を通じて案内したところ 10 名ほどの参加があり、とても嬉しかった。事務局の負担が大きいのでなにかお手伝いしたい。

悩みは、市外の高校に進学したため同級生のつながりが弱く寂しいことである。また、自身と同様に東京で飲食店をやっている人は多いと思うがつながりが弱いことも悩んでい

る。今後の展望として、八幡浜にゆかりのあるお店同士を紹介しあう仕組みづくりや、自身のお店で提供する食材をすべて八幡浜産にする「やわたはまフェア」をやりたい。フェアをするときはPRをお願いしたい。

(4) Dさん<70代・男性，市内出身，東京やわたはま会発起人>

出身者と八幡浜に興味がある人が集う場所があればと思い企画した。八幡浜市の港の風景や料理が好きである。また、みかんなどの柑橘は贈っても喜ばれるため誇りに思っている。大学進学時から首都圏に出てきているが八幡浜のためになにかしたいとずっと思っている。

東京やわたはま会には発起人として2年連続で参加している。自身のつながりがある首都圏の市外出身者にも声かけし、多くの人に八幡浜を知ってもらえた。出身者だけでなく、県外の大学生や首都圏企業の人たちも参加しており交流が生まれている手ごたえを感じている。発起人のひとりとして、「やってよかった」という充実感がある。

悩みは、現在の東京やわたはま会は交流のみで止まっていること。地元あまり利益を提供できていないかもしれないことを悩んでいる。交流会の結果、地元が盛り上がるようなビジネスを生み出すことが目標で、そのために自分がつながりのある企業の人に八幡浜の魅力をどんどんPRしている。

今後の展望として、東京やわたはま会に若い人が参加しやすい雰囲気を作りたい。また地域連携の一環として、八幡浜だけではなく、愛媛県の南予地域全体での交流会をやってみたい。

(5) Eさん<50代・男性，県外出身，Dさんの紹介で東京やわたはま会に参加>

Dさんの紹介で東京やわたはま会に参加したが、正直、参加するまで八幡浜のことを詳しくは知らなかった。

しかし、交流会に参加してみて、とても自然が豊かで産業や文化も魅力的なまちだと知ることができた。首都圏にはないものが多く、うらやましいと感じた。また、市長のプレゼンテーションや参加者との交流、販売されている特産品を見るなかで、首都圏に通用するものがたくさんあるのではないかと感じた。

悩みとして、もっと八幡浜のことを知りたいが八幡浜の人とのつながりがいないため、実際に八幡浜に行ってみても市民や企業とうまく関わられるか不安に思っている。

今後は、交流会で知った魅力を実際に現地で体験してみたい。また、柑橘や魚、お菓子など首都圏でも通用するものが多いと感じるため、自分の会社が運営している物産販売の拠点でも協力できればいいと考えている。

(6) Fさん<20代・男性，県外出身，八幡浜市の首都圏物産展スタッフ（大学生）>

愛媛県には一度旅行に行ったことがあり、愛媛県のファンにはなっていたが、八幡浜には行ったことがなく、「みかんがおいしいところ」というイメージだった。市が主催する首都圏物産展のスタッフとして柑橘のPRに参加した際に、八幡浜の農家や市役所職員と交

流するなかで言葉や雰囲気にも魅力を感じ、八幡浜のファンになった。令和元年のマーマレード大会開催時には初めて八幡浜を観光し、みかん園地に感動した。

東京やわたはま会には八幡浜のことをもっと知りたいという希望から初めて参加した。人の温かさを一層感じた。同年代の参加者とも交流できたことがよかったため、来年も参加したいと思っている。

今後は八幡浜のことを知人にもっと紹介したい。実際に自分の大学の後輩に八幡浜の紹介をしたところ、令和 2 年に開催する八幡浜市の首都圏物産展にイベントスタッフとして参加してくれることになった。また、八幡浜の人と関わる機会があれば今後も参加したい。

4 八幡浜に縁ある人たちの思い

以上の 6 名への聞き取り調査の結果から、以下のような特徴を分析した。

(1) つながる機会・場所を求めている理由

ヒアリングを実施した 6 名全員が八幡浜の出身者や縁故者とのつながりを求めていると話していた。ただし、集まる機会を求めている理由については、八幡浜縁故者と県外出身者で以下のような違いがある。

①八幡浜の縁故者 (A, B, C, D)

八幡浜の縁故者が同様の立場の人と集まる機会を求めている根底には、出身者と触れ合うことの少なさがある。Aさんが言及したように、高校卒業後に進学・就職で首都圏に来ている人はとても少ない。筆者の高校の同級生でも、県外進学の割合は近畿圏までの西日本圏域が多かったように感じる。

また、地元に戻省した際も、同世代の人たちが同じタイミングで帰省しているとは限らず、交流することが少ないとのことだった。同じ出身で同年代の人と関わる機会が少ないため、故郷と縁遠い寂しさがあるのではないかと。4人から首都圏交流会を定期的に開催してほしいという声が聞けたのは、地元の出身者と地元の言葉でつながる機会が故郷を再確認したいという気持ちの表出だと思う。

②県外出身者 (E, F)

筆者が首都圏で勤務している感覚としても、首都圏の人たちにとって八幡浜の知名度は高くない。柑橘や魚介類については知っている人もいるが、市民とのつながりはないばかりである。

そのような中、Eさんは、東京やわたはま会をきっかけに八幡浜のことを詳しく知り首都圏で通用するものがあると感じ、現地の人も仕事で協力できればと話していた。また、Fさんは八幡浜の物産展から柑橘産業や人の雰囲気などに魅力を感じ、実際に八幡浜を訪れ物産展で知り合った市民と交流している。

このように、八幡浜出身者や企業とのつながりにより、「八幡浜のことをもっと知りたい」という興味や、「仕事でも関わっていきたい」という気持ちが県外出身者に生まれている点がわかった。

(2) 八幡浜のために動きたい人たちの存在

もう一つの特徴は、八幡浜のために動くきっかけを求めていることである。八幡浜の縁故者は自分が育ったまちの特色や魅力を首都圏で伝えてくれている。Aさん・Cさん・Dさんは、自分にできる範囲で八幡浜のことを紹介してくれている。また、Bさんはこれまでどう関わっていいかわからなかったが、来年の東京やわたはま会では手伝えることがあれば手伝いたいと話してくれた。

また、県外出身者も、東京やわたはま会などで八幡浜の魅力に気づき、八幡浜のために動き始めている。Eさんのように東京やわたはま会をきっかけにこれから仕事などで関わりたいと声をかけてくれた人など、それぞれ八幡浜に対して想いを抱いている。また、Fさんは自分の後輩に八幡浜を紹介してくれるなど、働きかけをしている。

首都圏に出ているからといって、地元への愛着を失っているわけではないこと、県外出身者でも八幡浜に関わりたいと思ってくれる人がいることを確認できた。

5 他地域の先発事例～島根県「しまコトアカデミー」～

以上の分析から、八幡浜に想いを寄せる人たちの考えを活かすため他地域の先発事例として、島根県の「しまコトアカデミー」を検討してみたい。

「しまコトアカデミー」は首都圏の人たちに「島根県に対する自分の関わり方＝しまコトプランを見つけてもらうこと」を目的に、島根県しまね暮らし推進課がはじめた首都圏講座である。講座の定員は15名と少数で構成されている。期間は8月から翌年1月までの約半年で、月に1回程度の講座が開かれている。この講座は【①座学で島根県のことを知る・学ぶ】、【②島根県に短期インターンシップして、現地で体験する】、【③自分ごとに落とし込み、プランとしてまとめる】という3ステップで構成されている。全体を通して、受講生がこれから島根県とどう関わっていくかを考える講座となっている。

この講座の特徴は、「“移住”しなくても、地域を学びたい！関わりたい！」という人たちに向けた講座だということである。必ずしも移住・定住を目的にしていなくても、島根県のファンをつくるための講座であるため、首都圏にしながら島根県と関わる人（関係人口）の創出につながっている。

また、講座を経て発表されるしまコトプランの多様性も特徴である。例えば、島根と東京をつなげるために旬の初物を取り寄せて東京で味わう「ハツモノ！倶楽部」を開くというプランや、家族と数年かけてUターンするプランなどである。目的にもあるとおり、島根県と自分の関わり方を見つける講座であるため、自分にできる範囲のプランが発表される特徴がある。

この講座を受けた受講生へのアンケート（2012年～2016年の5期受講生）では、約6割の人が講座終了後も島根県に関わる活動をしており、うち半分以上が首都圏で行動を起こしているという回答結果がある。島根県に住んでいても住んでいなくても、地域に関わる活動ができることを十分に証明しているといえる。この講座は他の自治体でも実施されており、鹿児島県鹿児島市「かごコトアカデミー」や和歌山県田辺市「たなコトアカデミー」など市でも実施されている。

「しまコトアカデミー」が島根県の「関係案内所」として機能しており、離れていても

島根県に関わってくれる関係人口が次々と生まれている。

6 首都圏在住者と八幡浜との関わりをさらに深める 3つの提案

ヒアリング分析や先発事例をもとに、首都圏在住者の八幡浜への関わりをさらに深めるための方法について、以下の 3 点を提案したい。なお、この提案は筆者が中心になって関わることを前提としている。

(1) 「やわたはま関係飲食店紹介制度」の創設

首都圏において八幡浜とのつながりを求めている人への入り口の 1 つとして、首都圏と八幡浜をつなぐ場所を紹介する「やわたはま関係飲食店紹介制度」を創設すべきと考える。これはCさんのヒアリングの際に提案してもらった「八幡浜にゆかりのある飲食店を紹介しあう仕組み」をヒントにしている。飲食店にスポットを当てたのは、ヒアリングで得た「八幡浜出身者をつなげる機会・場を求める」関係人口のニーズに応えるためである。

現在、首都圏において、八幡浜出身者が経営している飲食店や首都圏に進出している市内企業は、筆者の知る限りでも 6 店舗である。これらの店舗をパンフレットのような形で 1 つにまとめ、それぞれの店舗ごとに設置してもらうとともに、行政も積極的に PR を行う。この仕組みができれば、以下のような利点が生まれると考える。

- ・ 八幡浜の縁故者が経営するお店に行くことで、経営者をはじめとした出身者とのつながりが生まれる
- ・ 八幡浜の縁故者で集まる機会や場が増加し、八幡浜への愛着が湧く
- ・ 八幡浜に興味のある人が、地域の特徴について出身者から直接聞く機会が生まれる
- ・ 飲食店同士の横の連携で、それぞれの店の売り上げ等の利益が増加する

今回、パンフレットという形を考案したのは、お店によってさまざまな営業スタイルがあるためである。筆者の知るこの 6 店舗だけでも、レストランや居酒屋、パン屋など営業のスタイルが異なる。カウンター越しに来店者と話す機会が多い店もあれば、なかなか直接話す機会が持てない店もあるため、最低限としてパンフレットの整備が必要だと考えた。もちろん接客機会の多い店では、営業の負担にならない範囲で自分の知っている八幡浜の風土や産業などの情報を直接伝えてもらえるほうがいいと考えている。



図 3 飲食店で八幡浜のことを話す様子

この制度の特徴は、八幡浜の縁故者と直接話す機会が生まれ、人と人、人と店がつながる機会が生まれる点である。一般的な観光情報であれば県東京事務所やアンテナショップなどで手に入れることができるが、実際にそこで育った人だからこそわかる生の情報は人づてでなければ得ることは難しい。これからより深く八幡浜に関わりたいと考えている首都圏の「関係人口」に応えるためには、「モノ」だけではなく「人」とのつながりをつくる

ことが大切である。

なお、首都圏において筆者が知っている 6 店舗以外にも出身者が経営する飲食店はあると考えられる。この飲食店の存在も市民から人づてで聞いてから筆者が実際に伺った。情報があふれている現代だからこそ、地元での関係構築にも励み、関係店舗を発掘し随時更新していく必要がある。

表 1 首都圏にある八幡浜関係飲食店(五十音順)

名称	場所	形態	特徴
笑ひめ	台東区 浅草	居酒屋	<ul style="list-style-type: none"> ・じゃこ天や今治焼き鳥など、愛媛県の郷土料理を提供 ・お酒の種類が豊富(みかんのお酒などもある) ・アットホームな雰囲気のお店
きくち	品川区 南大井	居酒屋	<ul style="list-style-type: none"> ・魚料理にこだわっている居酒屋 ・ランチメニューあり ・時折、経営者の出身地の八幡浜市大島から送られてきた魚介類が提供されることもある
砂々良	新宿区 西新宿	居酒屋	<ul style="list-style-type: none"> ・隠れ家的な居酒屋 ・魚介類のお造り盛り合わせや塩焼きなどのほか、おつまみが多数 ・日本酒や焼酎などの品ぞろえも豊富
塩パン屋 パンメゾン	江東区 吾妻橋	パン屋	<ul style="list-style-type: none"> ・八幡浜市に本店のある「パンメゾン」の 3 号店 ・本店は、たっぷり使ったバターの香りとほんのりとした塩味が人気の「塩パン」の元祖の店 ・塩パンをアレンジした「塩メロンパン」や「エビ塩パン」など、塩パンにこだわって販売している
鉄板 DINING 莢	新宿区 内藤町	レストラン	<ul style="list-style-type: none"> ・カウンター前で調理する和牛や魚介類の鉄板料理は絶品 ・魚介類は八幡浜市から直送されている ・落ち着いた雰囲気の隠れ家レストラン
リストランテ・ オット	中央区 銀座	レストラン	<ul style="list-style-type: none"> ・八幡浜市の「リストランテ・アマルフィ」の 2 号店 ・愛媛県産、八幡浜産の魚介類など食材を使用 ・ランチコースあり

(2) 「やわたはま関係案内所」の創設

5 章で取り上げた島根県「しまコトアカデミー」に倣い、当市でも首都圏在住者向けに八幡浜のことを知ってもらうための場「やわたはま関係案内所」を設けるべきと考える。これは、東京やわたはま会の参加者に八幡浜のいまを知ってもらい、自分なりの八幡浜との関わり方を深く考えてもらうことが重要だと思うためである。これは単なる観光情報では

なく、八幡浜の人を紹介し、人との交流をさらに生むための仕組みである。

ヒアリングではEさん、Fさんのように八幡浜の人との交流機会を欲している県外出身者が確認できている。特に、Eさんのようにこれからビジネスとしても関わりたいという人については、単なる視察対応だけではなく、人と人をつなげ、息の長い取組にしていく工夫が必要である。

市内の行政・企業にとっても、首都圏などの外からの風を受け入れることで、新しいアイデアや連携が生まれ、事業が生まれることが期待できる。

八幡浜のことを知るきっかけの 1 つとして東京やわたはま会にただ参加するだけでは八幡浜に対する想いはなかなか深まらないだろう。恒常的に八幡浜にかかわってもらうためにも、実際に八幡浜に来てもらい、現地で一緒に考えてもらう仕掛けが求められている。

(3) 首都圏イベントのPRの実践

首都圏にはCさんのように、八幡浜の食材を使ったフェアなどを企画してくれる人が存在する。また、飲食店や店舗などでも、今後八幡浜関係のイベントを開催したいと考えている人がいるかもしれない。関連するイベントについて、筆者も一個人として積極的にPRしていきたい。まずは筆者が知った情報を、筆者自身のつながりや SNS などで積極的に発信していくことから始めたい。

首都圏で八幡浜の応援のために動いてくれる人の存在は、市民の自信を取り戻すことや市民を勇気づけることにもつながるはずである。首都圏と八幡浜の距離が近づくためにも、まずは地道な取組が必要であると思う。

おわりに

今回レポートを作成するにあたり、首都圏にいる八幡浜関係者から想いを聞くことができた。八幡浜を離れても変わらず愛着を持っている人、そしてこれから八幡浜に関わろうとしている人など、八幡浜は地域内からだけでなく地域外の多くの人にもたくさんの応援を受けていることに気づくことができた。

筆者は東京で仕事と生活をする機会に恵まれ、東京で勤務してきた約 2 年間で、地域内の人だけではなく、首都圏の人ともつながりができた。地元に戻ってからもそのつながりを生かして、地元だから手に入る魅力的な情報を他地域に積極的に発信していきたい。そのために今まで以上に地域に足を運び、地域の声を拾える行政職員になりたい。

参考・引用文献

総務省『関係人口』ポータルサイト <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/index.html>

八幡浜市ホームページ <http://www.city.yawatahama.ehime.jp/>

指出一正『僕らは地方で幸せを見つける』ポプラ新書、2016年

田中輝美『関係人口をつくる 定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽舎、2017